

2017年度埼玉組東北研修旅行

実施報告書

2018年8月30日

埼玉組執行部

「埼玉組東北研修旅行」に寄せて

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、国難とも言うべき未曾有の激甚災害となりました。震災より 7 年が経過し、報道やメディアも震災についての報道が減り、風化の速度は上がりつつあるように思われます。

埼玉組では、昨年に引き続き震災地域の現状を把握すべく、被災地視察を 6 月 21 日及び 22 日の 2 日間に渡り訪問して参りました。

21 日は、福島県郡山市より富岡町へ。そして福島第一原子力発電所の近くを通り、浪江町、南相馬の原町別院へ立ち寄り、東北別院に向かいました。途中、放射線線量計で計測しながら移動しておりましたが、避難区域内の線量は事故当時より下がったとは言え、まだまだ高線量でした。震災前、町には人々の生活があった。しかし、現在帰宅困難区域内は、完全に時間が止まっていると言うことをただ実感するしかありませんでした。ただ 1 つ、異質であったのは、地面に規則正しく並んだ汚染土を入れた大量の黒い袋が至る所に見られました。浪江町など、避難区域の一部解除がされましたが、ようやく復興のスタートラインに立ったところです。

22 日には、東北別院より仙台近郊でも津波被害が大きかった仙台市荒浜地区並びに名取市閑上地区へと視察に赴きました。荒浜地区は約 13 メートル、閑上地区は約 8 メートルの津波に襲われ、かろうじて家の基礎部分が一部確認出来ました。そこは当時数百世帯もの集落があったとは想像できないほどに何も無く、人の営みがあった事実を懸命に訴えているようでした。仙台市は沿岸部主要道路のかさ上げ整備を行い、荒浜地区は小学校を震災遺構として保存し、一帯を海浜公園として整備計画が決まっています。名取市は被害地域全体のかさ上げ工事が進み、沿岸部は主に工場地として再開発が進められています。ゆっくりとではありますが、新しい街作りが進み、もう一度美しい街並みや港町を目指して、街は動き続けています。

震災の現状を目の当たりにした今こそ、仏教が説く大切な「ご縁」の意義を再認識し、宗祖の教えに導かれ、阿弥陀如来に願われた「われら」として、日本各地で災害に遭った御同朋に寄り添い、改めて私たちに何が出来なのかを、いっそう力強く問い続けていかななくてはならないと思います。

埼玉組組長 大滝和明



線量は、富岡駅付近のみ通常の線量であるが、駅から離れると線量は5倍前後の上昇が確認された。

富岡駅

福島県双葉郡富岡町大字仏浜字釜田（かまでん）にある、JR 常磐線の駅。

当駅は東北地方太平洋沖地震とその津波で全壊した。そのため、JR 東日本は津波対策などを施した上で駅を震災前の位置より北に 100m ほど移設し、交通広場とともに整備して復旧させている。周辺は福島第一原子力発電所事故以降、2013 年 3 月 25 日に警戒区域から避難指示解除準備区域に移行し自由に立ち入り可能（宿泊禁止）となったのち、2017 年 4 月 1 日に避難指示を解除された。



仙台教区浜組 西願寺

福島県双葉郡富岡町本岡新夜ノ森 2 3 6

「帰宅困難区域」に位置し、封鎖されている。

福島第一原子力発電所より約 7 km 地点

線量計の数値は 1.6 マイクロシーベルト 前後。

国道 6 号線の福島第一原子力発電所入口交差点を通過時は、約 6 マイクロシーベルト を記録。

※参考：埼玉県春日部市の庄和総合支所（三宝寺近郊）の線量（H30/5/15 行政測定）は、

0.058 マイクロシーベルト（年間 0.08 ミリシーベルト）

帰宅困難区域（立ち入り制限）

放射線量が非常に高いレベルにあることから、バリケードなど物理的な防護措置を実施し、避難を求めている区域。年間積算線量が 50 ミリシーベルトを超え、5 年間を経過しても年間積算線量が 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域。

居住制限区域（立ち入り自由だが、原則宿泊不可）

将来的に住民の方が帰還し、コミュニティを再建することを目指して、除染を計画的に実施するとともに、早期の復旧が不可欠な基盤施設の復旧を目指す区域。年間積算線量が 20 ミリシーベルトを超えるおそれがあり、引き続き避難の継続を求める地域。

避難指示解除準備区域（立ち入り自由だが、原則宿泊不可）

復旧・復興のための支援策を迅速に実施し、住民の方が帰還できるための環境整備を目指す区域。年間積算線量が 20 ミリシーベルト以下となることが確実であると確認された地域。



仙台教区浜組 正恩寺

福島県双葉郡浪江町川添南大坂 1 5

福島第一原子力発電所より、約 9 km地点。

前述の「帰宅困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の三つに分割されていたが、浪江町の一部は平成 29 年 3 月 31 日に「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」が解除された。

当地区は指示が解除されたが、周辺は避難時のままの状態であり除染作業員を時折見かけるくらいであった。



福島県双葉郡浪江町の請戸港

津波により、周辺集落は壊滅的な被害を受けた。津波による死者は 181 名。

福島第一原子力発電所より、6 km 地点（原発を視認出来る位置）。

発電所事故による関連死は、383 名。

漁港の復旧が進み、係船する岸壁が使用可能となり、平成 29 年 2 月に漁船が戻った。現在は、26 隻が 10 km 以上離れた海域で試験操業を続けるものの、請戸近くでの漁は再開できていない。



仙台教区 原町別院

福島県南相馬市原町区南町 1 - 7 0

地震により、本堂が傾いている状態のままあった。また、本堂内には、行方不明者の御遺影や引き取り手のいない除染作業員の遺骨が安置されていた。

境内地には現地災害救援本部の活動拠点の一つである福島事務所を開設。現地の情報を正確に収集・発信し、全国からの視察を受け入れている。



仙台市若林区荒浜

東日本大震災では、平野部としては世界最大級とされる高さ13.7mもの巨大津波に飲み込まれ、仙台市内に於いては特に壊滅的な被害を受けた地区。

荒浜小学校ぐらいしか現存する建物はなく、約800世帯もの集落があったとは想像も出来ないほど何も無い。住居の基礎（土台）だけが遺されており、当時の被害の大きさが分かってくる。

周辺の一部は遺構として残され、広大な緑地帯（スポーツ施設など）として復興していくとのこと。



仙台市荒浜地区 震災遺構「荒浜小学校」

東日本大震災において、児童や教職員、地域住民ら 320 人が避難し、2 階まで津波が押し寄せた荒浜小学校。被災した校舎のありのままの姿と被災直後の写真展示等により、来館者に津波の威力や脅威を実感していただき、防災・減災の意識を高める場とすることを目的に、本校舎を震災遺構として公開。



宮城県名取市関上（ゆりあげ）

名取川を境に、仙台市と隣に位置する地区。仙台空港のある市。

名取市では、震災により 923 人の方が亡くなられたが、その多くが沿岸部に位置する関上地区に集中していた。

慰霊碑は、当時同じ高さの津波（8.4 メートル）が押し寄せたことを表し、芳名板には市民の犠牲者と市内で亡くなった人の計 944 人の名が刻まれている。

現在、関上地区全体をかさ上げするための復興工事が進んでいる。かさ上げにより居住の準備が整ってきてはいるが、震災から 7 年が経過したこともあり、当地区に戻ってくる世帯の中で、若い世帯は少ないとのこと。